

学会・博物館の連携と「地質の日」

中 条 武 司¹⁾

1. はじめに

2008年から「地質の日」の制定により、全国で様々な地質に関するイベントが開催された。化石・鉱物や地域の地質に関する展示、化石のレプリカ作りなどの体験学習、野外での地質観察会、一般市民向け講演会などが行われ、その多くが博物館を会場として実施された。その中には「地質の日」を推進する学協会が、博物館との共催で実施しているものも多くあった。

博物館の役割のひとつとして、歴史・文化・芸術・科学などの教育普及があるが、「地質の日」をきっかけとした地質学の普及イベントは、博物館の目的として合致したものである。しかし、広く地質学を普及するという観点で言うと、「地質の日」前後に、博物館でイ

ベントをするだけでよいのであろうか。もちろん、特定時期に全国各地でイベントを開催し地質学への関心を盛り上げるのは重要であるが、それは「地質の日」そのものへの関心を高めているに過ぎないとも言える。社会へ地質学を浸透させるのには、「地質の日」のイベントとともに、学校での教育、博物館での普及教育活動などが、常に行われていなければならないだろう。

では逆の観点で言うと、「地質の日」は私たち地質学に携わる者にとってどのような意味を持つのだろうか。その中で博物館などの社会教育施設の役割や専門家集団である学会や大学・研究機関との連携はどのようにしていけばよいのであろうか。本論では、地質学を専門とし博物館で働く者として、これらの点について述べていきたい。



写真1 自然史博物館での野外観察会「川原の石ころ」。京都府木津川。

1) 大阪市立自然史博物館
546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23

キーワード: 「地質の日」、地質学、普及イベント、学会・博物館の連携



写真2 自然史博物館の屋内実験「ジオラボ：水槽の中で地層を作る」。

2. 大阪市立自然史博物館のイベント

大阪市立自然史博物館（以下、自然史博物館）は1950年に大阪市立自然科学博物館として開館し、1974年に現在の大阪市東住吉区長居公園への移転と同時に自然史博物館と改称し、現在に至っている。2008年現在の学芸員数は、館長を含め16名で、そのうち地学系（地史研究室、第四紀研究室）の学芸員は6名である。

自然史博物館では、子ども向けから一般市民、学校教員向けなど様々な講演会、講座、野外観察会などのイベントを年間150回以上行っている。そのうち、地学に関するまたは地学の内容も含むイベントの数は、約2～3割を占めている。

地学系イベントは一年を通して行われ、その内容は講演会、化石採集、近郊の地質や地形の観察（写真1）、化石クリーニングや鉱物観察などの室内での実験や体験（写真2）など様々である。地学系のものに限らないが、自然史博物館でのイベントのほとんどは定員を上回る申込・参加がある。人気の高い「化石さがし」では、定員150名のところ、例年300～500人と、定員の2～3倍の申込がある。化石採集という子どもに人気のあるイベントとはいえ、それをきっかけに岩石や地質の成り立ちに興味を持つ子どももいれば、

子どもをダシに親が化石採集に来ている家族も見られる。

これらのことからわかるように、自然史博物館のイベントを見る限りでは、地質学への関心は決して低くなく、むしろニーズは高いと言える。それは、自然史博物館での継続的かつ多くの普及教育活動が、地質学を含む自然科学愛好者の裾野を増やしていていることを表している。

3. 大阪市立自然史博物館での2008年「地質の日」

自然史博物館では、2008年「地質の日」関連イベントとして、5月10日の「地質の日」当日に地球科学講演会「石油天然ガスをめぐる私たちの将来」、翌5月11日に「活断層を歩く：生駒断層」を行った（ただし「活断層を歩く：生駒断層」は雨天中止）。

地球科学講演会は、地学団体研究会大阪支部、日本地質学会近畿支部、日本堆積学会、自然史博物館の共催、そして石油技術協会の後援で開催された。講師は帝国石油株式会社の荒戸裕之氏にお願いし、「石油天然ガスをめぐる私たちの将来」というタイトルで開催された。同講演会は、これまでも地学団体研究会大阪支部と自然史博物館の共催で毎年開催さ

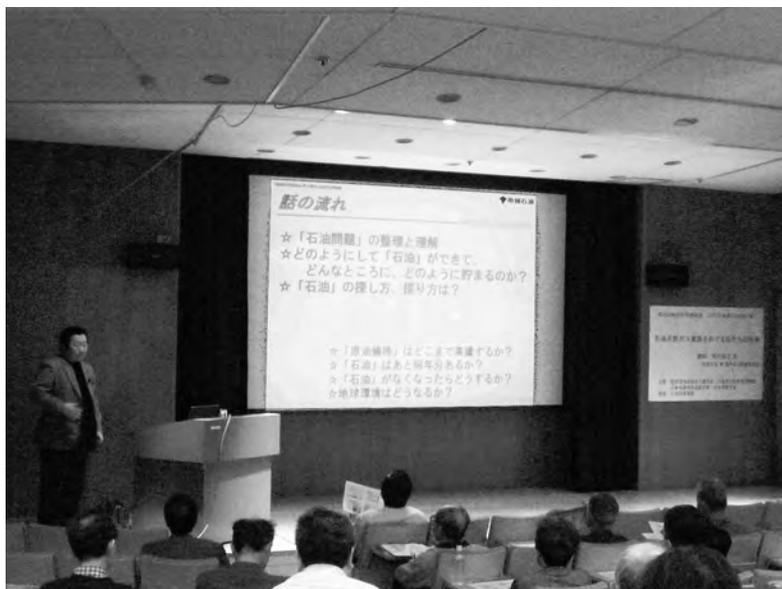


写真3 2008年の地球科学講演会「石油天然ガスをめぐる私たちの将来」。撮影：奥平敬元氏。

れ、回数は25回を数える。今年は「地質の日」初年度でもあり、同講演会および「地質の日」を盛り上げていこうという観点から、地質学会近畿支部および堆積学会とも連携を取っての開催となった。

講演は、地質学と社会の接点をもっとも深いもののひとつである石油・天然ガスをテーマに、荒戸氏に石油開発の現場の最前線の話から地質学と社会の関わりまで、多岐に渡りご講演いただいた(写真3)。現物の石油を来聴者に実際に見ていただいたり、根源岩や貯留岩を説明する所では博物館試料の砂岩や泥岩を実際に手で触れてもらったりと、内容をより理解してもらうための工夫がいろいろこらされた講演であった。来聴者は150人程度にもなり、講演終了後の質疑も活発であった。

一方、雨天中止となった「活断層を歩く：生駒断層」は、自然史博物館で2008年秋に開催した特別展「地震展2008」のプレイベントとして、春から連続で行っていた大阪周辺の活断層地形を見学するという観察会のひとつである。そのため、「地質の日」の関連イベントとして位置づけたが、特にそのための広報などは博物館としては行わなかった。もっとも、この「活断層を歩くシリーズ」は、定員(通常定員は30～50人)を超過している場合がほとんどであり、この「生駒断層」でも50人あまりの申込があった。

4. 学会・博物館の連携

結果的に、自然史博物館で「地質の日」関連イベントとして唯一行われた地球科学講演会は、自然史博物館と複数学会(地学団体研究会大阪支部、地質学会近畿支部、日本堆積学会)との共催であった。これは博物館の講演会としてもまれな取り組みで、「地質の日」というきっかけがあったからこそ実現されたものである。もちろん、共催とはいえ、計画段階から密接に連絡を取り合って作り上げていったものとはいえないが、お互いにメリットは大きかったと考えられる。

博物館側のメリットとしては、もちろん学会会員への広報があげられるであろう。博物館で行うイベントには残念ながら地質学専門家の参加が少ない。特に、大学生・大学院生の参加は皆無といってよいだろう。学会との共催を得ることで、学会会員の大学院生層が博物館に足を向けてくれることが期待される。また、学会などとの共催により会計の負担を分担できるメリットがある。これは講演会に限らないが、博物館・学会の連携による費用分担の結果、より多くのイベントを開催できるようになるであろう。

一方、学会は一般市民向けのイベントを開催することで学会活動の社会的アピールをできるが、博物館との連携でより効果的にアピールが可能となるで

あろう。その理由のひとつは、博物館という会場および博物館を通した広報である。博物館（この場合は自然史博物館）には自然科学好きな市民が多く集まっており、博物館の広報を通して、興味のある人に効率的にイベントを伝えることができるのは、学会単独ではできないことであろう。また、イベント慣れた博物館スタッフにその計画や運営をある程度任せることができるのもメリットである。

5. 博物館・学会にとっての「地質の日」の意義

これまで述べてきた自然史博物館でのイベントや学会・博物館の連携は、基本的には「地質の日」とは関係なく行われているもの、もしくは行われるべきものである。では「地質の日」にはどのような意義があるのだろうか。

「地質の日」事業推進委員会が期待するように、「地質の日」に全国一斉にイベントを開催することで、地質学の社会的なアピールにつながるであろう。小中学校での理科の授業数の減少や、大学の地質学系教員の減少が言われる中、地質学の社会へのアピールは重要である。一方で、何度も述べているように、地質学の社会的意義は「地質の日」だけでなく、ことあるごとに訴えていかなければならない事柄である。

それよりもむしろ、「地質の日」をきっかけにし、学会や大学などの研究機関・組織と、博物館・学校などの教育機関とが連携する機会を増やしていくことが重要なのではないだろうか。博物館の講演会の講師の多くは、学芸員の個人的関係により依頼している場合がほとんどである。しかし、「地質の日」という機会を活用し、学会などとの連携を図ることで、多様な分野の地質学分野の研究者を講師として招き、広く地質学の普及を図ることができるであろう。

研究者らにとっては、「地質の日」事業推進委員会が市民向けのイベント開催を働きかけることによって、自分たちの研究成果を社会にアピールする必要があることに気付くことであろう。そのことに気付くだけで「地質の日」の意義があるといえる。講演会などの演

目として、地質学と社会の関わりに着目したものが多く認められるが、地質学の醍醐味はそれだけではない。社会生活には直接関与しなくても、学術的に重要な研究が多くあるのは異論のないところであろう。また、固体地球をテーマにした地質学は、どのような意味でも私たちの生活に関わっているとも言える。地質学の研究が、たとえ私たちの生活に直接役立たなくても、地質学という科学がどのようなものであるかを伝えていくことに意義がある。研究者が楽しいと思っ

て行っている研究を伝えていくのに、社会に役立っている研究かどうかは本来的には問題ではないだろう。

6. むすび

自然史博物館での地学系イベントが常に定員を超える状況を考えると、社会での地質学への興味は決して低いものではないと感じられる。もっとも自然史博物館のある大阪の人口からすると、500人の申込であつても大した人数ではない。また、自然史博物館のイベント参加者は、友の会会員に代表されるような自然好きな参加者が多く集まっていることは否定できない。しかし限定的とはいえ社会のニーズがあるにもかかわらず、関心が低い、理解が足りないと嘆いているのは、地質学研究者が社会のニーズに対して無知なだけなのではなからうか。

もちろん、自然史博物館のイベントに多くの参加があるのは、地質学（を含む自然科学）の楽しさを継続的に伝えているからである。0から多くの人に地質学の楽しさや重要性がいきなり伝わるわけでは決してない。今後の継続的な取り組みに「地質の日」の真価が問われるのであろう。そのためにも、研究機関や学会の研究者らには、教育機関としての博物館を有効に活用して欲しいと願うのである。

NAKAJO Takeshi (2009) : Society, Museum Partnership and "Geology Day".

<受付：2008年8月26日>